

聖霊降臨後第19主日

「罪赦された者の幸い」

創世記24：15-20

ルカ7：36-50

(1)

修道女の「マザー・テレサ」は、マケドニアの豊かな商人の家庭に生まれました。

若いころ、汽車に乗っていた時、「全てを捨て、貧しい人々のために働きなさい」との示しを神から受けた彼女は、全てを捨ててインドのカルカッタの貧民街に住み込み、カースト制度の最下層に住む人びとの、何と汚物を毎日お世話をする奉仕に励んだといっています。

日本には、「賀川豊彦」がいます。彼は世界の賀川とまで言われた人で日本農民組合創設者です。徳島一の芸者の子として生まれた、自分の血筋にこだわっていたのですが、若いときにキリストと出会い、「人が救われるのは血筋にはよらず、人の欲によらない」(ヨハネ1：13)——、このキリスト御言に触れ、人生半ばに、180度の転換をして、伝道者となり、神戸市の郊外、新川のスラム街に住み込んだのです。

ある冬の朝、ボロボロの着物を身に着けた貧しい者が彼のもとを尋ねて来ました。その時、着ていた自分の上着を脱いで、裸となり、それを彼に与えたというのです。賀川さんは冬の寒さに耐えきれず、一日中銭湯に身を沈めていたといいます。主イエスは、「下着を取ろうとするものには、上着をも与えなさい。」

求める者には与え、借りようとする者を断るな」(マタイ5：41-42)と話されましたが、この御言を文字通り実践したのです。どうしたら尋常とは思えない親切、好意が出てくるのでしょいか。

わたしの妻の母教会は、日本基督教団の「姫路福音教会」です。その教会を48年の間牧会したのは「末永弘海牧師」です。牧会42年目に記念誌ができています。その記念誌に掲載されている一枚の写真を見て驚きました。自宅の中庭にフォードらしき自動車があるのです。昭和10年頃といえば、とんでもない裕福な家庭に生まれ育ったようです。しかし、弘海青年は、キリストと出会い、キリストに全てを献げる決心をいたしました。晩年、末永先生をお尋ねする機会がありました。部屋には見るべきものは何一つなく、無所有でありながら、すべてを所有しているお方ではないかと思われました。

何故、どうして、人はこれほど、キリストのためなら、身も心も全てを献げることが出来るのでしょうか。しかも、それが他からの強制ではなく、義務でも、まして責任感からではなく、自発的に、しかも損得勘定を入れない無私の精神がその人から溢れ出てくるから不思議です。

キリストと出会った多くの者は、「キリストには代えられません、世の宝もまた富も、この御方がわたしに代わって死んだゆえです。世の楽しみよ去れ、世の誉れよ行け、キリスト

には代えられませぬ。世の何物も」と、とこはばかるとなく讚美してきました。

(2) キリストのためなら身も心も、すべてをささげらわねぬ

そのヒントとなるのが、今朝お読みしたルカ7章の箇所にあるようにです。

主イエスが、パリサイ人から食事の接待を受けた時です。一人の「罪深い女」がとありますが、もう少し詳しくいえば、「罪をおかした女」でもあります。その女が香油のはいった石膏のつぼを持参して、主イエスの背後から近づき、突然、「泣きながら、イエスのうしろで、御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗り始めた」(マタイ22:1-14)というのです。なんとも睡然とする異様な光景ではないでしょうか。

すると、そばでこの有り様を見ていたパリサイ人が、「自分に触っている女が、どんな女であるかはお分りのはずではありませんか。あれは罪深い女ではないか・・・』と心ひそかに思っていた」(マタイ22:14)というのです。町中で、誰一人として知らぬものもない「罪に汚れた女」が、泣きながら、イエスの足を涙でぬらし、香油を塗り始めた振る舞いを、何故見て見ぬふりをしているのかとパリサイ人が主イエスを咎めたのです。

「罪深い女」が、具体的に何を意味するのかわかりませぬ。ひと昔前の日本では、水商売や旅館の仲居さんの経験があるだけで、

色眼鏡で見られていた時代がありました。

「罪深い女」とさげすんだのは、「パリサイ人シモン」であります。(1)の「シモン」は、マタイ・マルコ福音書には、以前「ライ病人」であったと記されていますが、同一人物かは分かりませぬ。

ところで、主イエスの足元に塗られた香油は、パレスチナ産の「オリブ油」ではありません。「石膏の壺」に入っていたとすれば、「ナルドの香油」であります。「ナルドの香油」は、ヒマラヤとかチベットの高山植物の根から採れる貴重な香料といえます。高貴な香りが失せないように石膏の壺に入れましたが、石膏の壺ですから一度割れば、一度しか使用できません。

「足に油を塗る」という習慣がユダヤにありました。一昔前の日本の旅籠では、一日の旅が終り、宿屋に着くと、ほこりだらけの足を洗うタライの水が用意されます。パレスチナ地方は、カサカサした砂ほこりの舞い上がるドライな荒野です。一日の旅の終わりに「足に油を塗る」という習慣がありました。

主イエスが、パリサイ人の食事に招かれていることをいち早く聞きつけた一人の女性が、周囲の目などまるで気にせず、主イエスの足元に近づいてあふれる涙を流しはじめたのです。おそろしく、それまでの悲しみ、苦しみ、そして何よりも、悔やんでも悔やみきれない罪深い生活からあふれ出てきた涙であったと思われませぬ。主イエスはそのあふれる涙を受

け止めて下さいました。このことがどれほど多くの人たちに慰めを与えてきたか計りしれません。

周囲から厳しい目で見つめられて、心をたくなに閉ざしていた一人の女が、このお方なら、わたしの全てを受け止めてくださると思えたのでしょうか、心が緩んで涙があふれ出てきたのです。私も心が打たれるのは、この女のおふれ出る涙を受けとめて下さった主イエス・キリストのお心であります。この女の異常とも、奇想天外とも思える振る舞いを、自分に対する愛と献身のしるしとして受け止めてくださった。

これを、そばで見っていたのがパリサイ人シモンです。『自分に触っている女は罪深い女ではないか・・・』と心ひそかに思っていた(7:39)のです。そのシモンに向かって主イエスは申しました。「シモン。あなたにいたいことがあります」と一つの譬えを話されました。

「ある金貸しから、二人の者が金を借りていた。一人は500デナリ銀貨。他の一人は50デナリ銀貨を借りていた。彼らは返すことができなかったため、金貸しは二人共赦してやった。では、二人のうち、どちらが金貸しを愛するほうになさうでしょうか。」シモンは「余計に赦してもらったほうです」と、即座に答えました。すると、主イエスは、「あなたの判断は当たっている」と申しました。これでは、先生と生徒の対話のようですよ。

聖書のいう「罪」とは何かと問われると、まことに答えづらいのですが、主イエスは、ここで「負債」・「借金」という卑近な例をあげて説明しておられます。

他人の罪は実によく分かります。しかし「自分の罪」は分りません。鏡を手にして、はじめて自分の顔に墨が付いていることに気づきます。

パリサイ人・シモンは、疑いなく、「この女は罪深い女だ」と確信していたのです。ところが、自分の罪深さに気づいていません。そのシモンに対して、主イエスは、「デナリ」の譬えを申しました。

「デナリ」とは、ユダヤ社会の一日の賃金です。日本の一日の平均賃金を、仮に五十円とすれば、五十デナリとは25万円。五百デナリは、その十倍の250万円です。

この譬えを耳にしたパリサイ人シモンは、自分は50デナリの負債者と受け止めたようですよ。そこで、主イエスは、「シモンよ。あなたが罪深いと見ている女とあなたとは、どれほどの違いがあるのでしょうか。50歩100歩の違いではないですか。シモンよ、このことがわかりませんか」とおっしゃったのです。

「顔かたちや身のたてを見てはならない。わたしが見るところは、人と異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る」(①サムエル16:7)とは、主なる神がサムエルに言われた言葉です。人間の真実の姿は、外側を見た

だけで分るものではありません。

ヒマラヤ山脈を低地から眺めれば、高い低いの違いはありません。しかし、一万メートルの上空から眺めたらどうでしょうか。

天の父は、例外なくすべての人間を罪人と見えています。「正しい人はいない。一人もいません。全てのひとが墮落しています。善を行う人はいません。」人さえないません」(ロマ3:10-11)。まじまじとまじまじの御言の指摘ですが、これがお互いの現状です。

さらに、付け加えておっしゃいました。

「あなたは、この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来た時、あなたは足を洗ってくれなかった。しかし、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来た時から、足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。だから、わたしは言うのです。』この女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女は余計に愛したからです。しかし、少ししか赦されない者は、少ししか愛しません」(7:44-47)。

異常な咄嗟の振る舞いとはいえ、「罪深い女」はこの時、わたしイエスに対して最善・最良のおもてなしをしたと言います。

(3)

わたしたちが、「自分は罪深い」と感じぬの

は、どういう時でしょうか。

例えば、ごく身近な人が病気になるば、心配もし、見舞うかもしれません。しかし、それほど親しくない人の場合はどうでしょう、それほど気にもとめないかもしれません。常日頃からわだかまりのある人や、ライバル意識のある人が病になれば、「おだいに」とは言っても、「あれは当然のこと」「病気になるば、少しは謙虚になるかも・・・」などと、ネガティブな思いがよぎります。

実際、自分の内面を正直に見つめれば見つけるほど、どういっわけか、こうした、何か、暗く、おぞましいものが自分の内につこめられていることを認めないわけにはいきません。他人が不幸や禍にあつと、密かに喜ぶ心の動きがあることです。ドイツ語には、「SOHA DEN FREUDE」「陰で喜ぶ」という言葉があります。何故か、人間には、こうした暗いおぞましい心根(こころね)を宿しています。自分には、今までそうした思いなど一度もないと断言できる人はいません。

パリサイ人・シモンは、常日頃から自分は神の戒めを守る品行方正・謹厳実直な人間であるとうぬぼれていたようです。しかし、うぬぼれほど始末に負えないものはありません。自分はあれとは違う、正しい人間であるとうぬぼれていればいるほど、他を敵しくさばきます。しかも、始末に悪いことは、自分の誤りに気づいていません。

ところで、この女性には、寝ても覚めても、

自他ともに、自分ほど罪深い者はないと自覚していたようにですから、彼女は、遠慮がちに、前からはなく、後ろから主イエスに近づき、「ナルドの香油」を主の足元に注ぎました。

どうも、どこか、この女性は、以前、主イエスにお目にかかっており、「あなたの罪は赦されました」との有難い御声をかけていただいたようです。それが嬉しくて、有難くて、なおさら、主イエスが慕わしく思われ、その喜びが涙となってあふれ、感謝があふれ出たのです。

「今まで犯してきた罪」「今犯している罪」「これから犯すであろう罪」、こうした罪の全てが赦されたと信じた者は、この「罪深い女」のように、主イエスに対する爆発的な愛と献身が現れるに違ひありません。

最後の「」の女の多くの罪は赦されています。というのは、彼女は余計愛したからです。しかし、少ししか赦されない者は、少ししか愛しません(マ：44-47)とおっしゃいます。

ルカ7章では、「テナリ」で警えました。またタイでは、「タラント」で警えました。

「あなたは一万タラントの負債を許されている」と主イエスは言われました。この膨大な赦しが心底分かれれば、高価なナルド香油をおしげなく捧げた「罪深い女」の気持ちが分かるというものです。周りが、ムタだ、無謀だ、常識外だということでも、平気でなせる人間になれます。自分の生も死も、時もまかせ

全てはキリストのものと分かれれば、自分を無にし、さびびつていきます。

ある牧師が馬鹿になるほど、我を忘れてキリストを信じようと迫りました。罪赦されていることの感謝と喜びは、こうしてあふれ出てきます。問題の全ては、どれほどの罪が許されているかの自覚にあります。

主イエスは彼女に念を押すようにしておっしゃいました。「あなたの罪は赦されています。安心して行きなさい。」「。すると同じ食事の席にしていた人びとが心の中で、「罪さえ赦す、この人は誰でしようか」とつぶやきはじめたということです。しかし、最後に、主イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」「今朝は、このままでいきます。」

【祈りませう】

主よ、わたしたちは自分の罪深さが、いまだに分かりません。相手のことなら良々かわります。「先祖伝来の空疎な生活からあがらない出されたのは、朽ちる物によったのではなく、さずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。」「どうか、キリストが十字架で流してくださった尊い血により一万タラントの負債がゆるさされていることに気づかせてください。

イエス・キリストの名により祈ります。」「アーメン」